

「六日前」

ヨハネ11:45～12:11

1. 奇蹟の目的

今回は「ベタニヤの奇蹟」という、死んでいたラザロを生き返らせたイエシュアの奇蹟についてお伝えしました。死んでいた人が、死後四日も経っていたにもかかわらず生き返ったのです。この驚くべき光景を目の当たりにしたユダヤ人たちが、どのように反応したのかを見てみたいと思います。

11:45 そこで、マリヤのところに来ていて、イエスがなされたことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた。

11:46 しかし、そのうちの幾人かは、パリサイ人たちのところへ行って、イエスのなされたことを告げた。ユダヤ人たちはイエシュアを信じました。目の前で死人を生き返らせたのですから、これが人の業ではないことは明白です。しかし、どんな奇蹟を見ても信じない者たちがいます。信じた者はイエシュアのもとにとどまるのがこのヨハネの福音書のテーマです。しかしここにパリサイ人たちのところへ行った者、すなわちイエシュアにとどまることなく、離れて行った者たちがいたことが記されています。ここにイエシュアの奇蹟の持つ意味が表されています。つまりイエシュアの行ったしるしと奇蹟とは、それを見た、あるいは聞いた者を信じさせるものではないということです。つまりイエシュアのしるしと奇蹟とは、イエシュアにとどまる者と、イエシュアから離れて行く者とを明確にすること、はっきりと分ける、区別する、裁くことを意味するのです。

私たちクリスチャンは、もっと大きな奇蹟、たとえば目の見えない人が見えるようになったり、歩けなかった人が踊り出したり、そして死んだ人が生き返るような奇蹟が、教会で、私たちの祈りや信仰によってたくさん起こったら、それを見聞きした多くの人が神様を信じて、救われて教会に来るようになると考えてしまいがちですが、その考え方は、このイエシュアの奇蹟からも解るように、間違った考え方だと言えます。奇蹟は、神様の御業は、人が神様を信じることができるよう、救われるように導く、促すものではなく、神様を信じる者と信じない者、神様の御国に入る者とそうでない者、神様に選ばれているかそうでないかをはっきりさせるものであるということです。もし奇蹟が人に信仰を与える、神様を信じさせるものであるならば、それを見聞きしたすべての人が神様を信じるはずで、信じない人がいれば、それは神様がその人を信じさせることができなかつた、救うことに失敗したということになってしまいます。神様の御業、ご計画は天地創造の初めから光とやみ、昼と夜、陸と海、種類ごとの動植物に表されるように「分ける、区別する」すなわち裁くことです。このご計画は一つも違わず成就するのです。神様の辞書に失敗の二文字はありません。

11:47 そこで、祭司長とパリサイ人たちは議会を召集して言った。「われわれは何をしているのか。あの人が多くをしるしを行っているというのに。」

11:48 もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうなると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。」

11:49 しかし、彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは

全然何もわかっていない。

イエシュアが神様から遣わされた神の御子メシアであるならば、ローマすなわち異邦人によって「われわれの土地も国民も奪い取ることになる」というのがパリサイ人たちの考え、恐れでした。聖書の専門家である彼らがなぜこのような考えを持つのが不思議です。預言者アモスの書にこう記されているからです。

アモス

9:11 その日、わたしはダビデの倒れている仮庵を起し、その破れを繕い、その廃墟を復興し、昔の日のようにこれを建て直す。

9:12 これは彼らが、エドムの残りの者と、わたしの名がつけられたすべての国々を手に入れるためだ。——これをなされる主の御告げ——

9:15 わたしは彼らを彼らの地に植える。彼らは、わたしが彼らに与えたその土地から、もう、引き抜かれることはない」とあなたの神、主は、仰せられる。

ここに「奪い取られる」などという記述が、一言でも書かれてあるでしょうか。律法の、聖書の専門家である彼らパリサイ人たちが、この預言を知らないはずがありません。ですからこのような致命的な誤解、間違いを犯すことは、本来あり得ない話なのです。ですからこれもまた、ある意味で「奇蹟」と呼ぶべきものであると以前お伝えしました。つまりこれは神様によってなされている、隠され、曇らされ、盲目にされているということです。パリサイ人たちはまさに「あなたがたは、全然何もわかっていない」者に、神様によってそうされたのです。

ローマ

9:18 こういうわけで、神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。

出エジプト

4:11 主は彼に仰せられた。「だれが人に口をつけたのか。だれが口をきけなくし、耳を聞こえなくし、あるいは、目を開いたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、主ではないか。

ですから神様は人を意のままに操ることがおできになります。人が人を操る洗脳や催眠、マインドコントロールといったものが存在しますが、人にできて神様にできないことがあるでしょうか。ですから神様はご自身の計画のためには、たとえその御心に沿わない者の口からでも、神様の御言葉を語らせることが可能です。その出来事が次に記されています。

2. 大祭司

11:50 ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が減びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考えに入れていない。」

11:51 ところで、このことは彼が自分から言ったのではなくて、その年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、

11:52 また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。

11:53 そこで彼らは、その日から、イエスを殺すための計画を立てた。

筆者であるヨハネは、大祭司が預言したと記しています。ここで注目していただきたいのは、大祭司によって、その預言によってイエシュアが殺されることが決定したということです。カヤパはイエシュアを信じてはいませんでした。しかし神様は彼の口に預言させました。もちろんカヤパの考えと神様のお考えはまったく違います。カヤパはイエシュアを政治的に危険な存在、自分たちの権威を脅かす存在としか見ていません。しかしイエシュアを殺すということにおいては神様の御心と見事に一致します。ここに神様の御業の不思議さがあります。つまり神様に逆らう存在である、悪もまた神様のご計画における駒の一つだということです。私たちは悪について、また悪魔について、神様に敵対する勢力、邪魔な存在、神様のご計画を妨げる、妨害する存在として捉えてしまいがちですが、このカヤパのように、悪もまた神様のご計画において重要な役割を担っていると言えます。

しかしカヤパは単に悪という存在ではなく、在職19年のれっきとした大祭司でした。ここにイエシュアの死の正当性、霊的に重要な意味を持っていることが記されているのです。これを理解するためにはモーセの幕屋の理解が必要です。

レビ記

16:15 アロンは民のための罪のためのいけにえのやぎをほぶり、その血を垂れ幕の内側に持って入り、あの雄牛の血にしたようにこの血にもして、それを『贖いのふた』の上と『贖いのふた』の前に振りかける。

16:16 彼はイスラエル人の汚れと、そのそむき、すなわちそのすべての罪のために、聖所の贖いをする。

ヘブル

9:7 第二の幕屋には、大祭司だけが年に一度だけ入ります。そのとき、血を携えずに入るようなことはありません。その血は、自分のために、また、民が知らずに犯した罪のためにささげるものです。

これはモーセの幕屋の時代に規定された「大贖罪日」と呼ばれる日に行われることに関する記述です。イスラエルこの日、大祭司の行う儀式によってその年一年間に犯したすべての罪が赦されました。つまりイエシュアの死がアロン、すなわち当時の大祭司によって成されるものであるということを記述することによって、イエシュアの死が、神様が律法に定めた贖罪の規定に沿って行われるものであること、つまり神様に受け入れられる、正式なものであるということを述べているのです。そしてそのイエシュアの十字架の死は、イスラエル人のための贖罪、イスラエル人の罪を清め、イスラエル人を赦すためのものであるということです。ですから私たち異邦人は、イエシュアの十字架の死と復活を信じて救われたのではなく、イエシュアの血によって贖罪がなされた、イスラエルにつながることによって罪が赦され、救われたと考えるべきです。イエシュアの十字架の死は、カヤパすなわち時の大祭司によって決定されたというこの事実にもまた大きな意味があるのです。私たちクリスチャンは「イエス様は、全世界の罪を背負われて十字架にかかられた」と教えられましたが、正確

にはそうではないのです。イエシュアは、イスラエルのそむきの罪の赦しのために十字架にかかられたのです。私たち異邦人は、このイスラエルにつながる、モーセとイスラエル人とともにエジプトを脱出し、荒野を旅した在留異国人のような存在として救われ、約束の地が指し示す神様の御国に入る者として、このイスラエルにつながる者として選ばれたのです。この大祭司カヤパの預言は、その事実を物語っていると考えられます。

またイエシュアの十字架の死は、たしかにイスラエルの贖罪の規定に則ったものですが、本来のものとは決定的に違うところがあります。それは「ただ一度」ということです。本来の大贖罪日の規定では、この儀式で罪が赦される有効期間は一年限りです。ですから毎年毎年、つまり何度も贖罪のために血を流さなければならぬのですが、イエシュアの場合はその限りではありません。ヘブル人への手紙こう記されています。

ヘブル

9:25 …年ごとに自分の血でない血を携えて聖所に入る大祭司とは違って、キリストは、ご自分を幾度もささげることはなさいません。

9:26 もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。

つまりイエシュアの血は、動物のそれとは違い、「ただ一度」で永遠に有効な、完全なささげ物だということです。そしてこの御言葉も、異邦人に対してではなく、ヘブル人への手紙、すなわちイスラエル人、ユダヤ人に対して書かれたものであるということも、イエシュアの十字架の死が、イスラエル人の罪に対してのものであることの証拠と言えます。

3. エフライム

11:54 そのために、イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをしないで、そこから荒野に近い地方に去り、エフライムという町に入り、弟子たちとともにそこに滞在された。

なぜイエシュアはエフライムに行かれたのでしょうか。なぜエフライムだったのでしょうか。たまたま偶然ではありません。これにも意味があると思われます。先ほど11:52で「散らされている神の子たち」という表現がありましたが、それがまさにこのエフライムなのです。エフライムとは、アッシリア帝国に滅ぼされ、捕囚となって方々に散らされた北イスラエル王国の別称で、異邦人化してしまったユダヤ人を象徴する名前です。そのエフライムを探し出し、集めてユダともう一度一つにすることもまた神のご計画の一部です。エゼキエル書にこのような預言があります。

エゼキエル

37:19 彼らに言え。神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは、エフライムの手にあるヨセフの杖と、それにつくイスラエルの諸部族とを取り、それらをユダの杖に合わせて、一本の杖とし、わたしの手の中で一つとする。

イエシュアは「散らされている神の子たち」であるエフライムを捜し出し、一つに集められるお方です。それ

以外にはない、そのためだけに来たと言え公言しておられます。

マタイ

15:24 しかし、イエスは答えて、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません」と言われた。

ルカ

19:10 人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

捜して救う、つまり誰でもいいわけではありません。このようにイエシュアが語られた救いとは、明らかにあらかじめ選んでおられた人に対して、たとえそれが失われ、行方不明になったとしてもそれを捜し、見つけ出し集められることを意味していると考えられます。

4. 過ぎ越しの祭

11:55 さて、ユダヤ人の過ぎ越しの祭りが間近であった。多くの人々が、身を清めるために、過ぎ越しの祭りの前にいなかからエルサレムに上って来た。

時はイスラエルの三大例祭の一つである「過ぎ越しの祭」が間近に迫っているという状況でした。ここで、多くの人々が「身を清めるために」祭りの「前」にエルサレムに上って来たと言われています。祭りとはすなわちエルサレムに上り、神殿に入ることを指しますので、身をきよめないで神殿に入ることはできません。この身の汚れと、そして清めに関する規定は、レビ記12～15章などに詳細に記されています。神殿の祭司たちは、祭りのために神殿に入る者たちの身体に何の病気も欠陥もないか、特にツアラアトに侵されていないか事前に厳しくチェックしたと考えられます。祭りにはガリラヤやユダヤの全土から、ほとんどすべてのユダヤ人が集まって来ます。この祭りにエルサレムに上って来ない者は非国民、イスラエルの民から断ち切られるからです。ですからその祭司たちによる身体検査のために、ユダヤ人たちは前もってエルサレムに上って来る必要があったと考えられます。これだけ述べても、イスラエルの祭りが、私たち異邦人が捉えている祭りの概念とはかなり違ったものであることが解ります。祭りとは本来、歌って踊って楽しく騒ぐものではなく、神様の御前に立つことを意味するのです。誰でもかれでもが気軽に参加できるものではないのです。それでも彼らユダヤ人たちは万障繰り合わせて、イスラエル全土から、群れを成してエルサレムに上って来るのです。

そしてこの過ぎ越しの祭の最中にイエシュアはユダヤ人の指導者たち、祭司長やパリサイ人たちに引き渡され、十字架にかかれて死なれます。つまりイエシュアは当時の全ユダヤ人の前で十字架にかかれるのです。しかしこれは終わりの日に、地上再臨されたイエシュアが全てのイスラエルの民、ユダヤ人をその御許に集められることにつながると考えられます。

11:56 彼らはイエスを捜し、宮の中に立って、互いに言った。「あなたがたはどう思いますか。あの方は祭りに来られることはないでしょうか。」

11:57 さて、祭司長、パリサイ人たちはイエスを捕らえるために、イエスがどこにいるかを知っている者は

届け出なければならないという命令を出していた。

この当時はイエシュアを捕えて殺すために捜し求めていた彼ら祭司長、パリサイ人たちですが、終わりの日には、イエシュアを王なるメシアとして捜し求め、呼び求めるようになります。イエシュアによって全ユダヤ人がエルサレムに集められ、彼らはイエシュアを王なるメシアと呼び求める、これが神様がアブラハム、イサク、イスラエルと交わされた契約の成就、ご計画の完成である御国の到来です。これらの記述は、それを指し示す型としての出来事と考えられます。

5. 第一日

12:1 イエスは過越の祭りの六日前にベタニヤに来られた。そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。

なぜイエシュアは六日前に来られたのでしょうか。聖書の中で「六日」と聞いて思いつくことはやはり創世記における神様の「天地創造」の御業ではないでしょうか。神様は七日目に休まれるまで六日間でこの世界を創造されたことが記されているからです。創世記における神様の六日間の天地創造、そしてその完成、安息までの七日間は、単に世界の成り立ちを説明したものではなく、神様のご計画の全体像、マスタープランを指し示す「型」です。イエシュアは過ぎ越しの祭の「六日前」にベタニヤに来られたとあります。これを天地創造の型にあてはめるならば、天地創造の初め「第一日」ということになります。

創世記

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。

1:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

1:4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

1:5 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

天地創造の第一日目は、光がやみの中から呼び出されたことが記されています。これがイエシュアが「死人の中からよみがえらせたラザロがいた」という記述に結びつくと考えられます。ラザロがイスラエルの民、ユダヤ人を表していると前回述べました。イスラエルは「光とやみとを区別」するように他の地上の民族とは区別された、呼び出された、選出された特別な存在です。このイスラエルとイスラエルにつながる者は「光」すなわち救い、そしてそれに属さないものは「やみ」すなわち滅び、という神様のご計画が浮かび上がってきます。

このように、イエシュアは過ぎ越しの祭の六日前、すなわち十字架にかかられ「完了した」と宣言されるまでの六日間の第一日目と、創世記における天地創造の第一日目とを結び付けて、神様のご計画を表しておられると考えられます。そしてその完成、神様の御国を宴、楽しい交わり「晚餐」にたとえて表されていると考えられる記述が次です。

6. 御国の人

12:2 人々はイエスのために、そこに晩餐を用意した。そしてマルタは給仕していた。ラザロは、イエスとともに食卓に着いている人々の中に混じっていた。

12:3 マリヤは、非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。家は香油のかおりでいっぱいになった。

マリヤはイエシュアを囲んだ晩餐の席にナルドを用意してきました。この晩餐とナルドを結びつける記述が雅歌にあります。

雅歌

1:12 王がうたげの座に着いておられる間、私のナルドはかおりを放ちました。

旧約聖書ではナルドは雅歌のみに登場します。雅歌は花婿である王と花嫁である王の愛する者が交し合う愛の詩集です。つまりマリヤは王の愛する者、そしてイエシュアは王として表されているのです。その王の足を髪でぬぐうことはひれ伏す、服従、そして礼拝を表す行為と考えられます。つまりマリヤはこの時イエシュアを王として、また恋い慕う花嫁として迎えた、受け入れたことが表されていると考えられます。

また足に香油を塗る理由は諸説ありますが、香油が王にささげられるナルドである以上、足と王にまつわる預言があてはまると考えられます。

イザヤ書

52:7 良い知らせを伝える者の足は山々の上であって、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神が王となる」とシオンに言う者の足は。

「良い知らせを伝える者」それは神の国の到来を告げ知らせるイエシュアです。その足が「山々の上にある」ということはイエシュアが「いと高き方の子」神様から遣わされた御子であることを意味しています。そして平和、幸い、救いがシオン、すなわちイスラエルに現されること、すなわち神様の御国が完成することが、マリヤがイエシュアの足にナルドの香油を塗った行為が指し示すものであると考えられます。そして「家は香油のかおりでいっぱいになった」とは、王なるメシア、イエシュアのご支配が全地を覆うことが示されていると考えられます。

そしてこのイエシュアを囲んだ晩餐でラザロ、マルタそしてマリヤのとった行動に、神様の御国における人の姿、御国に住まう者たちの型が示されていると考えられます。すなわちラザロのように「食卓につく」こと、マルタのように給仕「仕える」こと、そしてマリヤのように「礼拝する」こと、これらが御国に用意されている私たちの生活、ライフスタイルだと考えられます。

7. 光とやみ

12:4 ところが、弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしているイスカリオテ・ユダが言った。

12:5 「なぜ、この香油を三百デナリに売って、貧しい人々に施さなかったのか。」

12:6 しかしこう言ったのは、彼が貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼は盗人であって、金入れを預かっていたが、その中に収められたものを、いつも盗んでいたからである。

天地創造の第一日目は、「光とやみ」についての記述です。ですからこのように「光」に反対、反抗する、逆行する「やみ」についても記されています。それがマリヤが「ささげた」と、イスカリオテ・ユダが「盗んだ」ことの中に「光とやみ」として対照的な、相反する存在として表されていると考えられます。

12:7 イエスは言われた。「そのままにしておきなさい。マリヤはわたしの葬りの日のために、それを取っておこうとしていたのです。」

12:8 あなたがたは、貧しい人々とはいつもいっしょにいるが、わたしとはいつもいっしょにいるわけではないからです。」

ここでのイエシュアの結論は「そのままにしておきなさい」です。つまりマリヤのすることを邪魔するな、干渉するな、離れていけということです。ここにも光とやみが分かれることが示されています。そして「やみ」を指し示すイスカリオテ・ユダ、盗人に対して「貧しい人とはいつもいっしょにいる」ことが宣言されていますが、これは施しをすることについて述べられているのではなく、盗人が貧しさとともにある、盗人がいつも、永遠に貧しさの中にあるという「やみ」を指し示す言葉です。では「光」はというと、その逆を考えれば良いわけですから「ささげる者はいつも豊かさの中にある」という素晴らしい逆説が生まれます。

12:9 大ぜいのユダヤ人の群れが、イエスがそこにおられることを聞いて、やって来た。それはただイエスのためだけではなく、イエスによって死人の中からよみがえったラザロを見るためでもあった。

12:10 祭司長たちはラザロも殺そうと相談した。

12:11 それは、彼のために多くのユダヤ人が去って行き、イエスを信じるようになったからである。

そしてここにも「光とやみ」に象徴される出来事が描かれています。「大ぜいのユダヤ人の群れ」これがイエシュアのもとに集められる、ともにあるということが神様の御国を指し示しています。これが「光」です。そして「やみ」はイエシュアと「ラザロも殺そうと相談した」とあるように、イエシュアに反抗する様子の中に示されています。それはイエシュアのために「多くのユダヤ人が去って行き、イエスを信じるようになった」とあるように、「やみ」の行いが失敗するためです。

創世記

1:4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

1:5 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

このように、光とやみを分けられ、区別され、そして光を見て「良しとされた」、つまりやみを「悪」とし、御顔をそむけられたことが、イエシュアが十字架にかかれるまでの六日間の、その第一日目の中に、創世記における天地創造の第一日目に表された神様の御業に象徴されていることを述べました。この「第一」に焦点

を置いた聖書理解は非常に重要、いや最も重要、まさに「第一」です。なぜならイエシュアがこう言われているからです。

マタイ

6:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。

神様のご計画である神の国は、「第一」の中に「初めに」表されているのです。それが創世記の天地創造の御業であり、その第一日目に表されているということです。すなわち「光とやみとを区別」されること、それが聖書全体に貫かれ、このヨハネの福音書においてもそれは例外ではないということです。そもそもこのヨハネの福音書は、1章の冒頭から「初めに、ことばがあった」とあるように、創世記の1章を非常に意識して書き始められています。随所にその結びつきがあっても、何ら不思議ではなく、むしろそう考える方が自然です。そしてそれは、天地創造に示された、神様のご計画を一つも違えることなく正確に実現しようとしておられるイエシュアの御父に対する忠実さの表れでもあります。そこに一切の私情を挟まない、神様から「遣わされた者」としての徹底した姿勢が見受けられます。イエシュアのこの姿勢こそが、御父と御子が一つであるという真理

の内実であり、イエシュアの御名がすべての名にまさる名として息あるすべてのものによって崇められる所以だと言えます。王なるメシア、イエシュアをほめたたえましょう。